青春

朝倉　杏奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青春

【Ｎコード】
Ｎ９４１７Ｘ

【作者名】
朝倉　杏奈

【あらすじ】
三題話で「空、青春、お母さん」という内容で書きました。
はじめて書いてみたんですが、楽しく書かせてもらいました

「センター行ったぞー」
「ショート中継に入れ！2つで止めろー」
「ナイスバッティン！」

青空の下、高校球児たちが練習に励む。
「よし、ラスト行くぞ」
と言って一人の少年がノックする。
彼はもう引退した身であるが、プロに進むことが決まっており時々練習に顔を出している。
流石にプロにスカウトされるだけはあってノックするバットコントロールも抜群である。
さらに、主将として率いていたために後輩からの信頼も熱い。
最後のノックの玉がホームに帰ってくる。

バシーン！

心地よい皮の音をさせてボールがキャッチャーミットにおさまる。
彼はそのボールをみて、
「よっしゃ！これで練習終わり。後のストレッチとかダウンはよくやっておくんだぞ」
と言って練習を終了する。
「ありがとうございました」
後輩たちは元主将に挨拶すると、現主将を中心にダウンを開始する。
「おつかれさん」
私はそう言ってスポーツドリンクの缶を投げて彼に渡す。
「っと」
彼は難なくそれをキャッチして缶のプルタブを開ける。

「いつも思うんだが、普通に手渡しするって選択肢はないのか？未来のプロ野球選手にたいする敬意が感じられんぞ、マネージャー」
と言う。
これがいつものやり取りであるのだが、この後が現役時代と少し違っていた。
以前なら『はいはい。なってから言って下さいねー』とあしらっていたのだが、一応指名を受けた以上、拒否しなければプロ野球選手である。
私はとりあえず、
「そーゆーことは活躍してから言ってよね。活躍したらいくらでも手渡ししてあげるわよ」
と言っておく。
まぁ…手渡ししていない理由はあるにはあるが、本人には言える訳がない。
彼はドリンクを飲み干すと、何気なく私に言う。
「久々に一緒に帰るか？野球部に入ってからあんま二人で帰ってないしな」
「あ…う、うん」
私はドキっ、としてしまい一瞬返答につまってしまう。
コイツがこんな事言うなんて珍しい…
今日の練習で偶然一緒になったが、これが初めてと言う訳ではない。
何回か一緒にはなったのだが、彼は後輩から人気があり、いつも後輩を交えて一緒に帰っていたのだった。
「んじゃ、着替えてくっから待っててくれ」
彼はそう言って部室に入る。
いつもは部活の主将とマネとして会話してるから、緊張するなぁ…
これはチャンスかもしれない！
そう、私は彼のことが好きだ。
野球部でマネージャーをする前から…私達は幼馴染でずーっと一緒にいる。

彼が野球を始めたのも私とのキャッチボールからだったくらいだ。
彼とずっと一緒に過ごしてきて、幼馴染だと思っていたのが恋心に変わったのは、3年の夏の大会だった。

私達の高校は総合力で見ればあまり強いほうではなかった。
でも、彼を投打の軸として力をつけて予選の決勝までいったのだ。
迎えた予選最終戦。
9回裏。1点差ツーアウト満塁。
ここを抑えれば甲子園への切符が手に入る。
皆が抑えてくれることを願っていたし、抑えてくれると信じていた。
彼の投げた球は最高で、バッターを内野ゴロに打ち取って試合終了…と思った。
でも…その先で待っていたセカンドが後ろに逸らしてしまった。
結局それで2点入ってまさかのサヨナラ負けをしてしまい、夏が終わった。
試合が終わって私を含めて皆が泣いていた中で彼だけが笑っていた。
笑ってセカンドに、
「皆が一生懸命プレーしたんだ。この試合の1投1打最高だった。
結果は負けたかもしれないが、それを悔やむんじゃなくて良かったと思って終わろうぜ」
そう言って励ましていた。
それを聞いていた皆はさらに泣いた。
もう子供のように泣きじゃくり、彼は1人1人を慰めていった。
そうやって皆が解散した後に、私と彼は2人っきりで家へと帰った。
そういえばこの時も2人きりだったのだが、まだ幼馴染だと思ってたし、負けたショックもあってボー…っと帰っていた。
「なぁ…ちょっと公園に寄っていかないか？」
彼は立ち止まってそう言った。
私は、何も考えずに彼について行っていた。

私がベンチに座ると、彼は自動販売機にジュースを買いに行き、私に1本手渡す。
「そういや、こうやって俺が渡すってのも珍しいな」
と言って笑ってくれる。
私は、笑う元気もなくて黙って受け取って飲む。
彼も飲み始めて静かな時間が流れ出す。
何分たったころか、彼が突然話し始める。
「覚えてるか？ここから俺は野球始めたんだよ…」
「…そうだったね…確かここでキャッチボールしてたんだよね」
幼稚園のころ、男勝りだった私が無理やり彼をキャッチボールに誘ったのだ。
その当時彼はお母さんがいなくて、引っ込み思案な子供だった。
誰にでも気を使って、自分を出さなかった。
私はそれが気に入らなくて声をかけたのだ。
それ以降、毎日この公園でキャッチボールするのが日課になっていた。
「それから中学、高校とお前と一緒に野球やってたけど…もう終わりだなぁ…」
「うん…そうだね…」
彼は、ドラフトにかかるのがほぼ確実であり、地元の九州の球団に入る予定だ。
私は関東の大学への推薦が決まっており、一緒になることはまずない。
彼は、空を見上げながら、
「もっと野球したかったなぁ…あいつらやお前と…もう終わりなんてなぁ…」
「……」
「俺があそこで3振を取ってたら…もう1点取っておけば…」
そう言って拳をぎゅ、っと握る。
「くそっ！」

その拳を突然ベンチに叩きつける。
「何で俺はもっと巧くなかったんだ！何で俺は皆を…」
さらに何回も叩きつける。
「やめてっ！！」
私は彼の腕に抱きついて止めようとするけど、彼の力は強くて全然止まらない。
「後1人だったんだ。あと1人で良かったのに俺は…」
何度も叩きつけてた拳からは血が流れている。
このままじゃ骨が折れちゃう…もしかしたらもう折れてるかもしれない。
私は無我夢中で、
「あなたのせいじゃない！」
と言って彼を抱きしめる。
力いっぱい抱きしめていたので、彼は振りほどくわけにもいかず、拳を叩きつけるのを辞める。
そうやって何分くらい過ぎたのか、彼の肩が震えてくる。
「ごめんな…」
そう言って関を切ったように泣き始める。
負けた時に泣いていた誰よりも熱く、激しく。
私は、彼の頭を抱いていた手を緩め、優しく抱きしめる。
そうして、また時間が過ぎる。
もう周りは夕日が出て、澄んだ青い空から真っ赤な空に変わっていた。
「言ってたよね…皆、最高のプレーだった。悔やまないで…って」
「……」
「私もそう思うよ。皆頑張ってたもん。私は胸張っていえるよ『私のチームは…私達のチームは世界一のチームだよ』って」
「……」
「だから自分を傷つけちゃダメ。この右手は私と彼方で作ってきた手なんだから。私の自慢…」

「…」
そう言って彼を抱きしめていた手を彼の手に当てる。
彼はその手を見て、
「っ…すまない…」
と言った。
「分かればよろしい」
そうして、私は彼の涙をみた。
チームメイトにも見せない涙を。

その後は無言で家まで帰ったのだが、その次の日から彼の事を直視できなくなっていた。
その感情に気が付くことが出来ずに暫く過ごして、最近になって【恋】であると分かったのだ。
私は今まで恋心を抱いたことがなかったので、どうしていいのか分からず、今までと変わらない付き合いをしていたのだ。
だけど！このままで良いとも思ってないし、今日が思いを告げるチャンスだと思う。
関係が壊れてしまいそうで怖いけど、このまま別れてしまうよりも思いを告げた方が絶対に後悔しないと思う。
そう考えている間に彼が制服に着替えて戻ってくる。
「？何か悩み事か？」
どうやら、私が考えているのを悩んでいると勘違いしたらしい。
「んーん。何でも無いよ。じゃあ帰ろうか」
「おうっ」
と言って私と並んで歩き出す。
彼と私が並んで歩くと身長が２５センチ差あるためにかなり見上げなければならない。
昔は私のほうが大きかったのに…一応、私も１６０センチはあるんだからね！

「しっかし、あいつらも纏まりが良くなってきたなぁ…こうなってくると引退したんだな。って身にしみるよ」
「そうだねー。マネの後輩もしっかりしてきたし、来年も頑張ってくれそうだよね」
「ま、絶対エースの俺がいなくなって戦力ダウンは否めんがな」
「はいはい」
私は苦笑する。
彼はいつものペースで話しかけてくれる。
最初は私も緊張してたけど、だんだん普段どおりの感じになってくる。
と、彼が突然公園の前で止まって、
「ちょっと寄っていかないか？」
と言う。
私はその瞬間、もうドキドキが止まらなくなってしまい、
「う…うん。いいよ…」
とだけしか答えられない。
彼は以前に座ったベンチに腰掛けて、私もその隣に座る。
私は、何か言わなきゃ…と思うけど何も言葉が出てこない。
どうしようかと考えていると彼がふと、
「なぁ…覚えてるか？ここで俺が手をダメにしそうになった事…」
と右手を見ながら言った。
「うん…覚えてるよ…」
だって…あの日から…私の思いが変わったんだから…
「俺はあの時本当に取り返しの付かないことをしようとしてた。お前が止めてくれなきゃこの手がダメになってたかもしれない」
実際に、手はひどいものだった。
次の日病院に行ったら、骨にヒビが入ってて医者に大目玉を喰らってしまった。
「俺はそのおかげでプロに行く事ができる。まだ野球が続けられる」
「そうだね…」

「ありがとう」
彼は私の顔を見ながら言う。
真面目な顔をあまり見ることが無いので私の顔は真っ赤になってしまう。
「後…言いたい事がある」
彼は私の顔を見たままで言う。
「お前のことは…ずっと母親みたいなものだと思ってた」
「は…母親？」
彼の突然の無いように意味が分からなくなってしまう。
ふつー見つめながら、同い年の娘に母親と思っていたなんて言わないだろう。
「小さいころから母親いなくって…ずっと面倒見てくれてたから母親みたいなもんだと思ってたんだ」
「あぁ…そういうことなの…」
ようやく意味が分かった。
でも、それって…私との思いと違う…って事だよね…
そう思った私は目を逸らしそうになる。
「でも、違ったんだ」
「え？」
そう言った彼は私を抱きしめる。
この前の状況と逆の状態だ。
私は突然の状況に何もできなかった。
「この前…お前に『一緒に作ってきた右手』って言われて気が付いた。俺はお前が好きなんだって。ずっと一緒にいたいんだって」
そう言って抱きしめる手に力がこもる。
「言おうかどうか迷ってた。でも、俺はお前に気持ちを言わないで別れるのは嫌だった。迷惑かもしれないが、これが俺の気持ちだ」
それを聞いた私も、彼の背中に手を回す。
「うん。私も好き。誰よりも好き」
涙を浮かべながら答える。

あぁ…この前の状況と本当に逆になっちゃったね…
そうやっていくら時間が過ぎたんだろうか…私には一瞬だったのか、すっごい長い時間だったのか判らなかったが、彼が腕を放して私の顔を見る。
「俺プロになっても最初は2軍だと思うけど…4年後、卒業するころにはエースになってお前を迎えに行くよ」
だから待っててくれないか？と言う。
そんなの私の答えは決まってる。
「うん！皆が彼方のこと誇れるくらいの選手になって迎えに来て！」
そう言って笑う。
「でも…私口約束だけで待ってられるほど強くないよ？態度で示して」
「？」
私は目を閉じる。
彼はきっと、ちょっとうろたえてるだろう。
でも、彼は私を抱きしめて唇を重ねる。
私達の恋物語はこうやってプレイボールを迎えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9417x/

青春

2011年10月26日11時20分発行